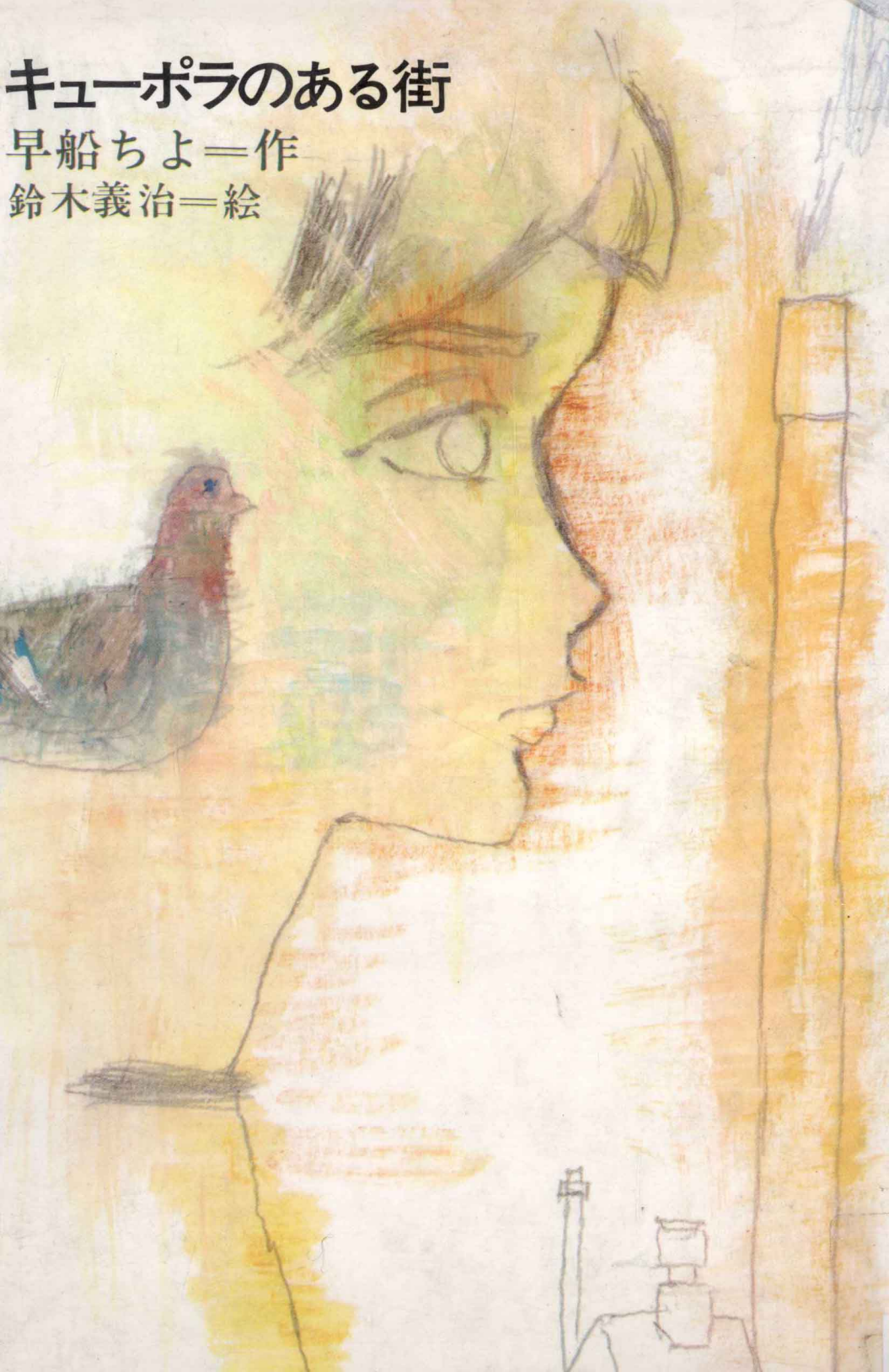


キューポラのある街

早船ちよ＝作

鈴木義治＝絵



早船ちよ＝作
鈴木義治＝絵



理論社名作の愛蔵版

《作者紹介》

1914年岐阜県古川町に生まれる。
新作家協会，児童文化の会会員。
主な著書には，この『キューポラのある街』
にはじまる五部作（理論社刊）の他
『山の呼ぶ声』理論社
『峠』『湖』『街』理論社
『おばけのオンロック』評論社，がある。
現住所⇒埼玉県浦和市瀬ヶ崎 326



1963年初版
1976年愛蔵版初版
NDC 913

8393-11035-8924

理論社
名作の愛蔵版

発行日	発行所	発行	制作	画家	作者	キューポラのある街
一九七九年六月第八刷	株式会社 理論社	山村光司	小宮山量平	鈴木義治	早船ちよ	
	東京都新宿区若松町一〇四 電話（二〇三）五七九一（代表） 振替東京九一九五七三六					



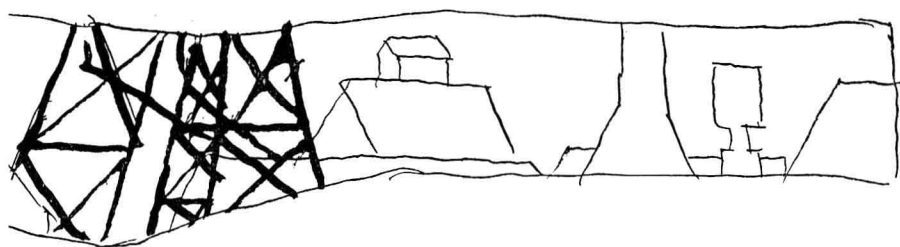
たくさんの壁

その壁をのりこえる

たくさんの伸びゆく者たち

——に

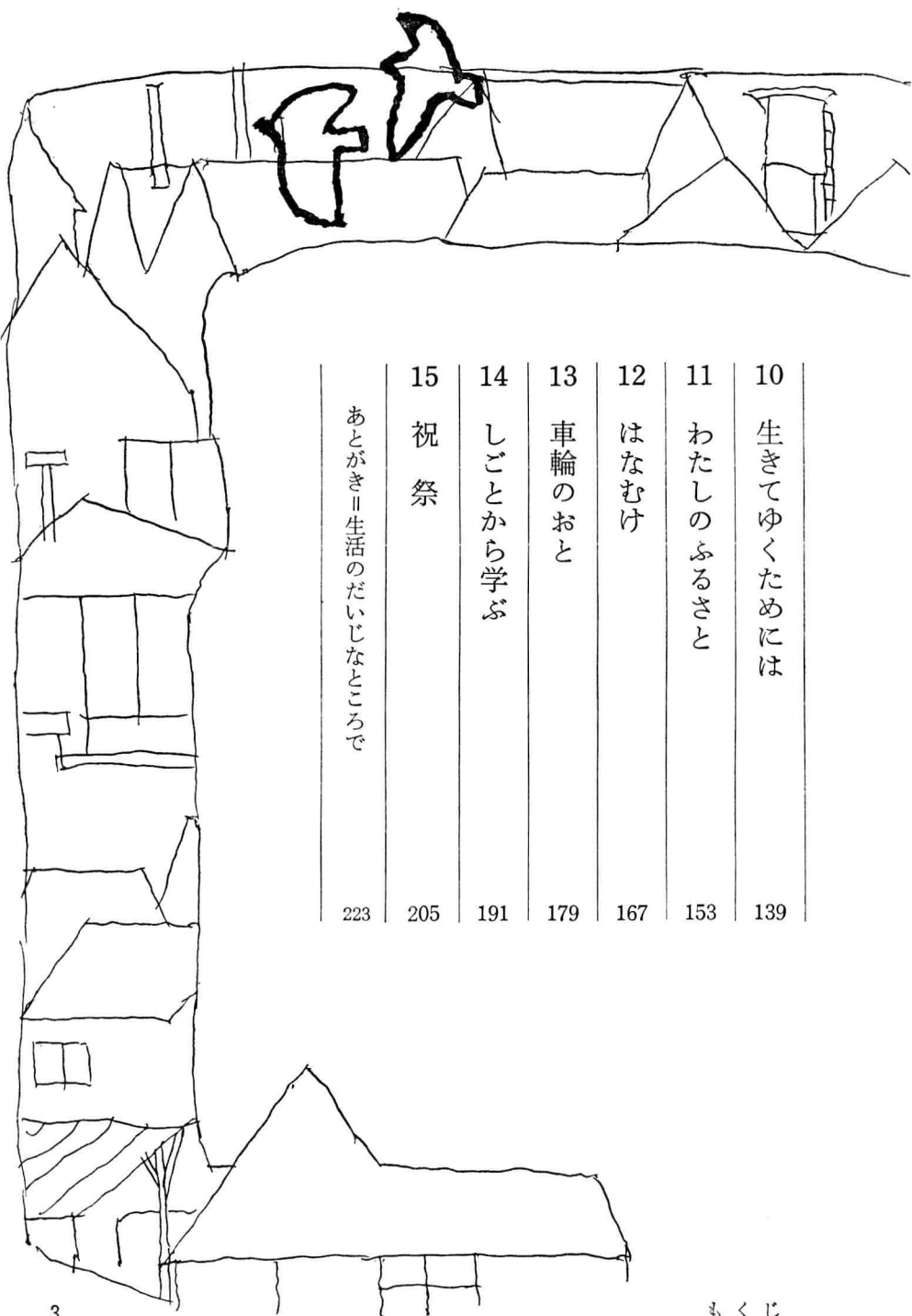
——まえがきに代えて



キューポラのある街

もくじ

1	生むこと・生まれること	5
2	少年とゆがんだ電柱の影	22
3	口紅のにおい	42
4	パチンコ横丁	58
5	ほんとうの生活	75
6	夜の工場街	93
7	初冬のあさ	107
8	職人氣質	115
9	キューポラのある街	123



15	祝 祭	205
14	しごとから学ぶ	191
13	車輪のおと	179
12	はなむけ	167
11	わたしのふるさと	153
10	生きてゆくためには	139
	あとがき 生活のだいじなところで	223

そうてい・さしえ

鈴木 義治



生むこと 生まれること

(今夜あたりくるな)——その予感^{よかん}が、ジュンのきもちのなかに、なかったわけではない。

ジュンは、中学校の補習^{ほしゅう}からのかえりに買^かってきたコロッケを、夕食のチャブ台にならべた皿へ、二つずつくばりわけていた。

かえりのおそい父と母のぶんは、経木^{きょうぎ}のつつみに分けのこしておく。まず、さいしょに弟のタカユキへ大きそうなのを二つ、つぎは叔母のハナエへ、そしてじぶんの皿にも二つのせる。肉屋は、五〇円でコロッケを一つまけてくれた。

(きざみキャベツを、このごろ、つけてくれなくなつたな)



ジュンは、その一つのコロッケをはさんで、ちょっとためらった。食いしんぼうのタカユキが舌なめずりをして、熱心にこつちをみているのが感じられるからだ。

——これを、まるごと一つ、タカユキにだけあげるのは、不公平よ。だって、おばちゃんも、もうすぐ赤ちゃんを生むんだもの。よけい食べさせてあげなきゃ。

ハナエとタカユキのために二等分しようとして、惜しくなった。ジュンは、ひとつあまったコロッケを、きちんと三つにわけて、また、チャブ台の上の三つの皿へくばりそえていく。

そのとき、とつぜん、叔母のハナエがいった。

「もしも、今夜あたりに……」

「え？ 何かいった、おばちゃん」

ジュンは、あわてて聞きかえす。きざんだキャベツを分け、その上へ、にんじんの新芽しんめをそえて、もりつけを美しくしようとしていた。ハナエの話しかけるのは、耳にはいらなかったのだ。

ハナエは、ソバカスの目だつ鼻に、小じわをよせて笑いかけながら、

「いえね、こん夜、かあちゃんのをすの間に、赤んぼが生まれそうになつたら……」

さつと、ジュンの顔いろがかわつた。

「えっ、ほんと、ほんとに生まれそうなの」

びっくりしたときの目をみはって、手をとめたまま、ハナエをまじまじと見る。

「ちよつと、そんな気がただけさ。そしたら、ジュンとタカユキだけだから、どうしようかな……」
すると、小学五年生のタカユキが口をとんがらせる。

「へつちやらだい。安井産院へそういつていきや、いいんだろ」

「いいに行つてくれる、タカユキ？」

「うん、ぼくにまかしとき」

ハナエは、タカユキにご飯をつけながら、

「ところで、ジロー親分。押入れのなかのかいフトン袋、しょつていつてくれる？」

「うへっ！ あいつを背負うの」

頭へ片手をやるタカユキを、ジュンは姉らしく気をおちつけて冷やかす。

「よわ虫！ 背負えないんだろ」

「ふうーんだ。そんなら姉ちゃん背負ってみろ」

ジュンは、それには答えないで、煤すすけたボンボンどけいを見あげる。七時一〇分だ。

（あと、二時間だ……よしんば、いま、それが始まつたつて）

九時になれば、母がビニール工場の夜業をすませて帰ってくるだろう。それに父……だが鋤いも物工場の〈炭たき〉職人である父は、きょうは三日おきごと

の「湯出し」の日だから、帰りは夜なかなになるはずだった。

ジュンは、なにげない顔をふせかげんに、食べることに熱心そうにしている。だが、ときどき、上目づかにハナエのようすをうかがった。

ハナエは、箸をときどきやすめて、なにかをはかるように、じいっと、外をうかがう目をした。顔色が、ふだんより青ざめてみえる。

軒端近くで、クルクルウー、クルクルウーと、ハトの鳴きかわす声がした。タカユキは、にっこり箸の手をとめて、その方へ顔をむけた。

「ハトのひながかえるんだぜ、おばちゃん」

「そう。そんなら、いま、卵をあつためてるときのね」

ハナエは、まどぎわまで立っていつて、耳をすます。

（ハトは、もう生んでしまった。けど、ひなはまだ、生まれてこないんだわ）

タカユキの灰ゴマ色の伝書バトのメスは、一日

ほど前に卵を二つうんで、巢についているのだ。

「ねえ、おばちゃん。あと七日で、ひなのメスとオスが卵からかえるんだぜ」

「メスとオス？　そうはつきり、一羽ずつときまっているかね」

「そうさ。ハトはいつだって、メス・オス一羽ずつそろって、かえるんだよ」

「ふうん、ハトって、生まれるときから仲よしなんかね」

「ハトは、卵から一七日めに、ちゃんとひなになるんだ。ほかの鳥なら、メスだけで卵をかえすだろ。

伝書バトなんて、かわりばんに、オスも卵をあつためてるんだぜ」

タカユキは、いばった顔をする。

「まあ、オスもねえ」

——人間よりか、このハトに生まれついたほうが、ましだったわ——と、ハナエは吐息をつく。

——赤んぼが生まれるというのに、この子のとうちゃんは帰ってこれないじゃないか。

ハナエの夫の啓吉は、天草の船主の八〇トン漁船に乗組んだ臨時雇いの機関士だった。若松通いの石炭船からのりかえて、去年の暮のサバ漁にでていった。そのまま、李ラインを侵犯したとかどで、威嚇射撃をうけ、船ごとつかまってしまった。釜山の収容所に収容された——という便りがあつたきり、それから一〇カ月近くなるのに、いつ帰ってこれるのか、目あてがつかないのだ。結婚して二年めのハナエは、啓吉が帰ってくるまで、下宿の世帯をたたんで、姉夫婦のいる、この鋳物の町・川口のジュンの家へころがりこんできたのだった。

タカユキは、父の辰五郎からはへひねくれ者のジローと、あだ名でよばれている。食いけ盛りで、盗み食いばかりでは足りずに、父母のるすをねらつて、小銭を持ちだしたりする。ハナエも、この家へきて一カ月ばかりの間に、二度やられた。それがばれたときの、ふてくされかたは、可愛げがなくて、ハナエは好きになれなかった。だが、そういうときのごまかしと、いいのがれのためのグズなずうずう

しきとはちがつて、ハトの話をしているとき、おやと思うほど、タカユキの目はかがやいてくる。

「ね、おばちゃん。ハトは、メスもオスも、ひなに おっぱいをやるんだぜ」

「おっぱいを？ まあ、オスが、どうして出すの」

「ううん。鳥はメスだって、ふつうは、おっぱいださないさ」

「わるい子、おばさんをついだのね」

「ちがうよ。ハトは、ひなを育てるとき、おっぱい、みたいなものを、だすんだよ。ノドから」

「へええ……」

「口うつしに、ひなの口へながしこんでやるのさ。

そやって、ひなを育てるにも、メス・オスいっしょなんだよ」

「ジロちゃん、よく知ってんのね」

ジュンも、たべる手をとめて、弟を見なおす気持ちをこめていった。

「そんなに仲よしだからなんだね。ハトは、平和のシンボルだって」

タカユキが、首をよこにふった。

「ちがう、ちがう。ハトのケンカはすげえぜ。もっとも、オスとオスのケンカだけどさ」

*

とけいが、八時を告げた。

「おやすみ、おばちゃん。あかんぼ、生まれそうになったら、いつでもたたきおこしていいぜ」

タカユキは、いつものように、すぐ、ねどこへもぐりこんでしまった。ラジオを枕もとへおいて、プロ野球のナイターの放送をきくのだ。

ジュンは、進学準備の宿題の数学にとりかかる。その机のわきで、ハナエは生まれてくる赤んぼうのためにおムツをぬいそろえている。

八時三〇分。

ジュンは、とけいのセコンドが耳について、なかなか、勉強のなかへはいりこんでいかれない。

「おばちゃん。とうちゃんとこ、ストの相談するなんて、いってなかった?」

「あんな小さな工場、ストやったら、つぶれちゃう

よ。それに、働いているみんなだって、とうちゃん

とおなじこと。一日でも働かなかったら干あがつちゃうものね、はははは……あつ、痛っ!」

ハナエは、ぬいかけのおムツをなげだして、前こごみになる。

「だいじょうぶ? おばちゃん」

ハナエは、血の気のひいた顔をあげて、痛みを耐えながら、じぶんがいい聞かせるようにいった。

「ジュン。びっくりしなくてもいいのよ。お産は、こわいことじゃないんだから」

「ね、もう、うまれそう?」

「うん。いっしょに、安井産院までいってちょうだい」

「え、いくわ、いくわ。持ってくるものは」

ハナエは、立ちあがって、

「この棚の上のフロシキづつみに……」

手をのばして取ろうとして、よろめいた。

「あ、あつ!」

「あぶないわよ」

ジュンは、ハナエをうしろから支えようとした。

ハナエは、うろうろと、座敷をひとまわりする。その着物のすそに払われて、ばらばらと水のとぶのを、ジュンは見た。

「ジュン、水がでちゃった」

「あ、羊水？」

ジュンは、おもわず息をのんだ。羊水は、赤んぼうが生まれるとき、胎児をおしだす働きをする。女子だけの〈保健体育〉の時間に、ジュンらは、そう教わった。それが早く出るといふのは……ジュンは、あわてて、何をしたらいいかわからない。ハナエの肩に手をかけて、おろおろする。

「しっかりしてね。ね、おばちゃん」

「ううん、破水しても……」

ハナエは、かがみこんで、額に手をあてて、何かに耐えながらいう。

「でもすぐには生まれやしないよ、ジュン」

しかし、ハナエにとって、はじめてのお産である。

——早期破水……難産——最悪の場合のことも考え

に入れておかねばならない。ハナエは、自分もおろおろしているのに気づきながら、戸口へそろそろおる。ジュンは、ちらっと、とけいを見あげる。八時四〇分すぎ。

「もう、九時にちかいもん。かあちゃんだって帰ってくるわよ」

ジュンは、自分にもいいきかせながら、手早くフロシキづつみをかかえて、戸口のタタキへとびおる。ぞうりだ。ハナエのぞうりを、そろえて出す。そのビニール製のが、なかなか叔母の足ゆびにつつかからない。ジュンは、ふるえる手で、持ちそえて、はかせてやる。

*

安井産院は、露路を出て五〇〇メートルほどいつて、表通りに面した町並へでると、すぐにある。途中は、ゴミゴミした小住宅と、ところどころに小店と、トタン塀の小工場がまじっているドブ川沿いの道である。

一〇〇メートルもいくと、ハナエはしゃがみこん

で、陣痛にたえた。

「おばさん、だいじょうぶ？」

「あ、……いた、た」

ジュンは、一気に走り着きたい気持ちをおさえて、しゃがみこみ、ハナエの手をとった。

しばらくすると、ハナエはたちあがった。そのまま、ジュンにもたれかかるようにして、そろそろ歩いていく。

すこしいって、また、しゃがみこんだ。肩で、大きな息をしたまま、かすかにうめいた。

「おばちゃん、おばちゃん」

「……」

「だいじょうぶ、おばちゃん」

「……」

「ね、生んじやいやよ。ここで生んじやいやよ」

「うーん……、だいじょうぶ。あーあ、つらかった」

ハナエは、きゅっと唇をむすんで、あぶなっかしい足どりで、またあるきだす。

ふいに、九時をしらせるチャイムがなった。ジュ

ンは、虚をつかれて、どきんとした。動悸がはやくなって、なかなかしずまらない。そのとき、うしろで叫ぶ声をきいた。

「おうーい、おばちゃん」

「あら」

二人は、立ちどまった。

「おうーい！ ねえちゃん」

「タカユキだわ」

仲秋ちゅうしゅうにちかい半月が、人影をぬうつと浮かびあがらせる。それが、走るようにして近づいてくる。ハナエが、おどろきをこめた声をあげた。

「まあ、お前。フトンを背負ってきてくれたの」

「タカユキ、よく目がさめたな」

ジュンもおどろくの、それには答えず、タカユキはフトン包みが歩いていくようなかつこうで、二人をおいこしていく。すりぬけざまに、この親分は、どなるようにいった。

「おれ、先にいって、安井さんに、よくたのんどくからな」

いつものグズとは別人のような、シャンとした声音である。

*

ハナエが案内された産室には、タカユキのしょうてきたフトン包みがひろげられ、ベッドのしたくができていた。

三〇歳ぐらいの体格のいい助手が、いった。

「さ、このベッドへ横になってくださいよ。いま、難産で、院長先生の手がはなせないんです」

「難産って……どうしたのですか」

ハナエは、ドキッとした顔でうけとめて、不安げに、ジュンの方をふりむいた。ジュンは、廊下のむこうの、あわただしい気配をうかがうように耳をすました。

「子癇なんです。ひどいケイレンがきちゃってね、子宮口が開ききっているのに、もう一時間も、赤ちやんがうまれないでいるんですよ」

助産婦の資格をもつ助手は、なれた手つきで、ハナエにてつだって、腹帯を、するするっと、という

いく。

「じゃ切開ですか」

「まあね。いま、市民病院の〇博士にきていただいて、内診をおえたところですよ」

「あ、いた……」

ハナエはベッドによりかかって、からだをエビのようにまげる。

「強くきますかね。さ、おじょうさん。産婦さんの手をもってあげてください」

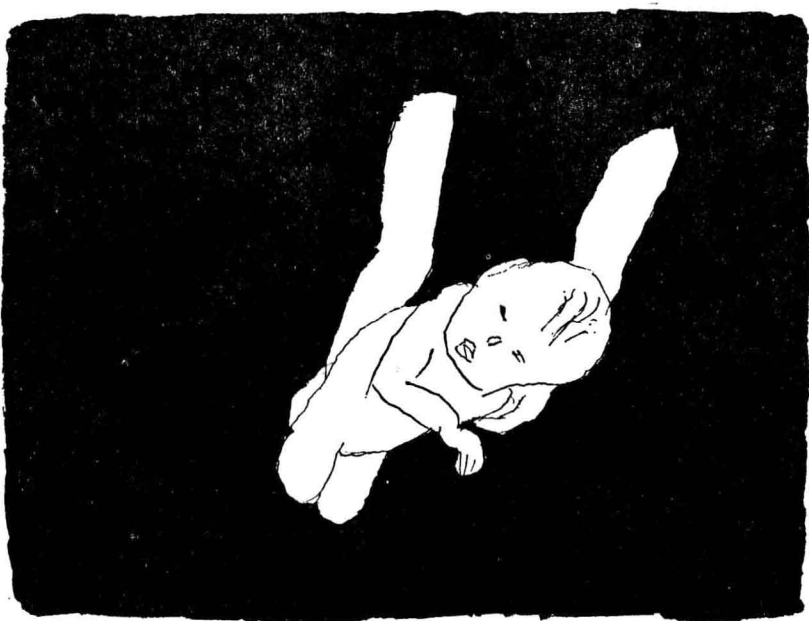
助手にいわれて、ジュンはあわてて、ハナエの手をにぎった。その手は、いたいほど強くにぎりかえられる。助手は、血色のいい太い腕を、ひじまでむきだして、ハナエの腹をさすりはじめた。

「このへんでしょう。……何分おきぐらいに痛んできますか」

ハナエは、痛みが遠のいたところで、ほっと息をついた。

「はあ、五分おきぐらいに」

「強くさしこんできますね。……ああ、そうだ。つ



いだから、O博士に、ちょっと見てもらいますか」
ハナエは、すこし考えてから、うなずいた。

「じゃ、博士にひとこと頼んできますから、おまち
になってね。おじょうさんは、そのまま。そうそう、
そうして、みてあげてください」

助手は、ジュンに——かわったことがあったら、
三室へだてた廊下のならびの産室へよびにくるよう
に、いい残して出ていった。

「子癇って、どんな病気？ おばさん」

「とっても、こわいそうだよ。ガタガタ、フルエが
きて、痛くて気が狂いそうになるんだってさ」

そのとき、犬が遠吠えするのような呻き^{うなり}ごえが、む
こうの産室から、きこえてきた。部屋が近いせいか、
その産室のけはいや、金属の器具のカチャカチャふ
れる音など、はつきり聞える。

「死ぬの？ 子癇になると」

「たいてい、助かるんだそうだけどね。……あ、い
た」

ハナエの陣痛^{じんつう}のきざみが、間が近くなった。いっ

たん痛みが遠のいて、ひといきついたかと思うと、つぎの痛みが潮のよせるようにおそってくる。

「ジュン、また、手をかしてよ」

「おばちゃん。きつく握るといいわ」

「痛いよ」

「がまんしたげる」

しかし、ハナエは、ジュンの手に力をいれることさえかげんして、がまんしているようだった。

——わたしを、こわがらせまいとしてるんだわ。こどもだから、とおもって。

ジュンは、ハナエの額に、じつとり浮いてくるあぶら汗を、ハンカチでふいてやりながら、自分よりたよるもののないこの叔母が、しきりに気のどくになった。わざと明るい、いたずらっ子らしい声をつくっていった。

「啓吉おじさん。いま、赤ちゃんが生まれるなんて、知らんわね。きつと」

「知ってたら、そりゃ、朝鮮海峡なんかとびこえて、すっとなできたくなるだろうにね」

すうっと、音もなく、ドアがあいた。ハナエもジュンも、はっとして、待ちかねた目をそっちへむけた。だが、ジュンの母の姿はそこになく、フロシキ包みだけが、ぬうっと出てきた。

「ねえちゃん、これ」

タカユキは、ドアのかけにかくれて、フロシキ包みだけを、つきだしているのだ。さっき、ハナエが用意してあるといった二包みの荷物のひとつである。

「まあ、タカユキ」

ジュンは、びっくりした。よく気がついた——とほめることさえ忘れて、むしろ、あきれ顔で弟をみた。

「かあちゃんは？ タカユキ」

「まだ、かえってこない。それで、工場までいいにいったんだ。すぐ、とんでくるってよ」

タカユキは、殺風景な産室内をこわごわ見まわし、鉄わくのはまったベッドにねているハナエを、のぞいてみた。そのときまた、けもののような呻きごえが、向うの部屋でおこった。